

『認知症の人の「はたらきたい」を叶える～その先へ～』2019.5.2

町田市つながりの開 DAYS BLG！理事長 前田隆行先生

○ゆき お立ちになって、お姿を見せてください。タカちゃんでございます。

○前田 タカちゃんです。よろしくお願いいたします。非常に緊張しております、ユキさんがさらにさらにハードルを上げていかれるので、ドキドキしております。本日は9時までお話をさせていただきまして、そのあと15分の質疑応答を考えております。

今回は、『認知症の人の「はたらきたい」を叶える～その先へ～』というテーマをいただいておりますので、そのテーマに沿ってお話をして行こうかと思います。

「前例を越えて」という全体テーマですが、私自身の紹介は何となくでいいです。一番大切にしてきたのは、「本人の声をいかに形にしていくか」。本人の声を聞いた者の責任として、いかに具体化・具現化していくかということを重点に置いてやってきました。声を聞いた者の責任というのが、きっとあると思うのです。

私は前に出るより後ろにいるほうが好きなので、きょうはたまたまここに座らせていただくわけですが、皆さんと同じです。ですから、きょうはこの時間だけでも、この時間を共有するメンバーということにしていいただければと思っております。

先ほどユキさんからもありましたように、先日、国が発表した大綱の中に、「予防」と「共生」という二つのテーマがありました。

「共生」と言うとは何となくよい言葉に聞こえる、うまい隠れみのみたいな感じがするので。そもそも、「共生」という言葉自体どうなのかなと…。昔から一緒に住んでいる街じゃないかと思うわけで、改めて「共生」と言うのはどうなのかなと思うのです。何か、よほど悪いことを隠そうしているのではないかなんて思っているわけです。

その悪いことというのは、「75歳以上の認知症の発症率を、今よりも1%遅くする」とか、いろいろな数値が出されていますが、そもそも認知症を予防するという確固たるエビデンスは、ないわけです。国が大綱の中には、「社会参加することで、認知症の発症を3%予防することができる」という数字が書いてありました。しかし3%ですよ。97%の人は置いておいて、その3%にもすごい予算をつぎ込むわけです。

でも、ここにもカラクリがありまして、もともとの英語のデータがあるのですが、そこには1.何%と書いてあるのです。これを日本語に訳すと3%になるのです。おかしいです。数字なのだけれど、日本語に訳すと3%になるのです。この辺もちょっとカラクリが見え隠

れしそうですけれども…。そんな数字だけでなく、「すべての国民は、認知症を予防することを努力義務とする」というようなことも書かれています。

今出ている大綱には、実は書かれていません。新オレンジプランが出たときに、「いよいよ出るぞ、出るぞ」というタイミングで、新オレンジプランの内容がちょっと変わったということは、皆さん御存知かもしれません。今回もそのために、直前にすりかえるという、そんな大綱の内容を見せていただきました。そこには、予防のことばかりです。認知症の発症を予防することが国民の努力義務であるならば、認知症を発症してしまった人はどうなのか。今、認知症がある人たちからしてみれば、「おれたちは、努力義務を怠った悪者ということだな」というようなことを言っています。そういう声です。

この「予防」というのは、どういうものなのか？ 「認知症の発症の予防はできない」とされているにもかかわらず、「予防、予防」と、ゴリゴリゴリゴリ押してきます。その裏にはいろんなことが隠されているのですが、もちろん治療、研究、なんちゃらかんちゃらというところが入ってきます。

大綱をすり替える——その内容を見たのですが、まさに「政治」でした。政治の内容です。こうやって日本は、ダメになっていくのだと正直思いました。でも、そこに本人の声があるわけです。「認知症になっても、今までと同じように、当たり前で暮らしていきたい」という本人の声があります。この声をいかに形にしていくのか？ 当事者の人たち、認知症の人たちと一緒に、これから認知症になるであろう私たちと一緒に、社会をどう変えていくのか。今ある社会をつくり直していく、または、もう一度デザインをしていくなどということが、恐らく今回の、全体テーマ、「前例を越えて創造する」というところにつながっていくのかと思います。

*現在は内閣府にも籍を置き「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」をつくる一員として関係者会議委員を務めております。

ぜひ、「声を聞いた。ああよかった、よかった」で終わるのではなくて、皆さんの周りにも認知症と診断された当事者の方が必ずいらっしゃると思いますので、その人の声を聞いて、何かできることを一つ始めていけば、きっと社会を創り直していくことになって、そこが恐らく予防に変わる…。そこを予防と呼ぶかどうかは別として、そういうことにつながっていくのかなと思っております。

では、私は一体どういうことをやっているのかということですが…。

(ビデオ上映開始)

○ナレーション 今、認知症を取り巻く社会が変わりつつあります。『土曜 NEWS まるわかり!』。

○三雲 こんにちは、三雲孝江です。

○渋谷 渋谷和宏です。

○三雲 今年も早いものでもう7月に入りましたね。

○渋谷 恐ろしいことで、もう今年も半年経ってしまったんですね。



○ナレーション 介護されるだけではない、認知症の人も働ける社会へ――。

東京都町田市の住宅街にあるデイサービス、『DAYS BLG!』。ここに通うのは、ほぼ全員認知症と診断された人たちです。

村山明夫さん 65 歳。3 年前にアルツハイマー型認知症と診断されました。介護レベルは 5 段階中の真ん中、要介護 3。

○村山 散歩に行っても、どこに行ったかわからなくなってしまうし…。

○ナレーション ほぼ全面的な介護が必要となる状態。しかし、ここに来るようになり、認知症の進行が遅くなったというのです。実はこの施設、全国各地から視察が殺到しているのです。ほかの施設とは何が違うのでしょうか？

○村山 一人で、もんもんと家の中にいたときの状況からしたら、もう最高ですよ。

○ナレーション 認知症の人が通うデイサービス、『DAYS BLG!』。ここに通うと、皆さん生まれ変わるといいます。ほかのデイサービスと、一体何が違うのでしょうか。皆さんの1日に密着しました。

朝10時、Tシャツに着がえて車でどこかへ…。10分ほど移動し、到着したのは車の販売店。実は、皆さんここで洗車の仕事をしているのです。2年前、こちらの車販売店から洗車の仕事を委託されました。1日1時間ほど週5日働いて、少額の報酬も支払われます。

○男性1 やりがいありますよ。

○男性2 何もできないと一般的に言われているけれど、仕事ができるということである程度、人として認められるということだよねえ。

○ナレーション 皆さん、働いてお金をもらうことに大きな意味を感じています。その仕事ぶりについて、販売店の方に話を聞きました。

○営業主任 やはり最初は、本当に大丈夫かなあと…。傷とかつけちゃわないかなあとか、いろんな所にあちこち出歩かないかなあとか、そういった心配はしていましたけれども。丁寧にやってくれますし、最初の心配がむだだったなあというのは、やってみるとすごく実感しています。

○ナレーション 働くことは強制ではありません。1日の初めに全員でミーティングを行い、仕事だけではなく、昼食の準備や洗濯、散歩などから、やりたいこと・やれることを自由に選ぶことができます。

午後の仕事は、ティッシュ配り。保険会社から委託された仕事で、自転車保険の広告が入ったティッシュを配ります。

○男性3 「BLG」で、再び地域なり社会の仲間とつながることができたということですよね。もう一度、生き返ることができた。

○ナレーション 多くの人の認知症の進行が遅くなり、働くことで生きがいを見つけ、笑顔になる。認知症に負けないデイサービスをつくったのが、理事長の前田さんです。

○前田 認知症になると、どうしても社会から切り離されてしまったりとか、ましてや「死んでしまおう」なんて思ってしまうような現実があるわけですけども…。BLGの場合は、「別に、認知症が何だ」というくらいの、そんな場所でもあるのです。これを日本全体に広げることによって、もっともっと生きやすい社会になるのではないかなと思います。

○渋谷 びっくりしました。皆さん、生き生きとして笑顔なんですよ。

○三雲 そうなんですよ。

(ビデオ上映終了)

○前田 こんな感じでやっています。「認知症デイサービス」という紹介がありましたが、私たちのところには、認知症のある方・ない方、いろいろな方がいらっやっています。

中には、統合失調症を発症してから 40 年という方もいらっやったりします。ここに来ることによって、「社会とつながることができた」とか、「生き返ることができた」とか、「認知症の進行が遅くなった」とかいうのがありましたが、そうではなくて、もともと持っている元気だったり能力だったり、認知症と診断されることによって機会が奪われていたということなのです。それを再びつないでいくと、元気になったということです。きょうは時間もありますので、どこまで行けるかわかりませんが、こんな内容を持ってきました。

「そもそも、こんな活動をデイサービスでできるのか？」というお言葉をよくいただくのですが、厚労省の通知が出ているのです。どういうものかといいますと、グイッとさかのぼって 2011 年です。2011 年に何が出たかという、「ボランティア活動の謝礼を受け取れる例」というものが既に出ているのです。

私自身は今のデイサービスを立ち上げる前に、今で言う「若年性認知症」、当時は「早発性アルツハイマー型認知症」とか、いろいろと呼び名はありましたが、そんな人たちと一緒に活動をしていました。ですから、「若年性認知症の方」とここに記載されていますが、この当時は若年性認知症の方に限らず、介護保険を利用されている方であれば、介護保険サービスの事業所に集まって、または暮らして、そこからボランティアの依頼主からの仕事に対して労働力を提供し、それに対する謝礼を受け取れますよという通知が出たのです。

これが出る前までは、こういった活動が認められていなかったのです。「そもそも認知症と診断された方が、働けるはずがないだろう」と、厚生労働省の方に言われました。「働けるはずがないだろう。働けるのであれば、介護保険のサービスは必要ないだろう」と言われました。でも、一人だと働けないけれど、仲間がいるとかサポートがあれば、まだまだ働けるだろう。だから、そのサポートの部分を介護保険のサービスが提供するのではないのかと…。こんなことを比較して伝えていきました。

社会保障全体で考えると、医療制度と介護保険の制度は同じであるはずなのです。例えば、がんと診断された人が、「こういう生活を送りたい。だから医療サービスを受けながら働く。医療サービスを受けながら生活していく」。一方で介護保険のサービスを考えてみると、認知症と診断されて、「働きたい。今までどおり当たり前の生活を送りたい」と言っている人

たちが、介護保険のサービスを受けながら働くことがなぜできないのだろうか？ 社会保障全体で考えると、ちょっとおかしいのではないかと…。医療サービスと介護サービス、内容は違えども、「本人が思う目標に基づいて、そこにサービスを提供する」ということは、当たり前のことなのではないだろうかなどということを、国にずーっと言い続けました。

本人と一緒に言い続けて、そしてついには当時の老健局長を引っ張り出してきて…。このボランティアの依頼主は保育園ですが、保育園の砂場を掘り返してみたり、ワックスがけをしてみたりといった仕事を一緒にしていただきました。こうやって一緒に仕事をすることによって、人は変わるのです。さっきの動画のスーツを着ていた営業主任も、当初は、「車に傷をつけてしまうのではないかと」、とか、「どこかに行ってしまうのではないかと」思っていたけれど、実際にその営業所で活動する、時間を共有することによって、あれだけ変わっていったのです。「あの心配は何だったのだろう。僕は偏見を持っていた」というふうに変わっていきました。

当時の局長もそうでした。一緒に活動を体験することによって、時間を共有することによって、「働けるね」と…。「ふだん僕は机の上でばかり仕事をしているから、僕なんかより全然働けるじゃないか」というようなことを言われていました。そこが起点となって、変わるのに約5年かかりました。この通知を出してもらっただけに5年かかりました。しかしながら、この通知を知っている方は、どのくらいいらっしゃいますでしょうか？ ありがとうございます。全体の1割にも満たない…。この通知に5年かかったのです。なかなか苦労しました。

この通知が出たとき、私は別の法人に——というか、大きな社会福祉法人の一職員でもあったので、そんな動きを自由にやらせていただいていたのですが、やはり、よく思わない人たちも出てくるわけです。事業所には10年いたのですけれども、いよいよ異動…いや、むしろやめてくれというようなことを言われて、やめることにしました。やめてから、あの通知が出たのです。だれかがやってくれるだろうと思っていたのですが、だれもやらず、言い出しっぺがやるしかないだろうと言われて、それはそうだなと…。

それで、このBLGという場所を立ち上げたのが、2012年の8月1日です。あの通知が2011年の4月だったので、1年ちょっとかかりました。それまでの間に、まずは地元の東京都町田市を地盤を固めよう、応援者をもっともっと多く募ろうということで、この1年ちょっとの間に、当事者の方、御家族の方、市議会議員、市役所、医者、弁護士…いろいろな人たちと、肩書きとかそういうのはおいて、すべて一市民として同じ時間を過ごそうというイベントを毎月やっていました。バーベキュー大会とか、流しそうめんとか、そういうことをやりながら地盤を固めて、8月1日にオープンしたということです。

現在は定員15名、スタッフ4名、1日当たり合計19名の同じメンバーとして、介護する・されるではなくて、どちらが介護を受けても、またはサポートを受けても、サポートを

しても、介護をしても、どちらでもいいと…。私たちは、スーパーマンではないのです。人の力を借りなければ、なかなかこの13人の動きをつくっていくことはできません。認知症があるなしにかかわらず、同じメンバーとして、「みんなの力を合わせて1日やっ払いこうよ」ということで、スーパーマンではないです。だれがいるからできるということではなくて、だれでもこのような場所をつくれるのではないかと思っています。それは、メンバーとしてみんなでやっ払いいくからです。

そこに、駄菓子屋の小学生なんかが混ざってくるわけです。駄菓子屋の小学生が、結構来ます。1日10何人とか、多いときは30人くらい来たりします。小さい事業所なので、手づくり感満載の駄菓子屋さんです。当事者の方と接する小学生に、認知症があるとかないとか、ここはこんな場所だよとかは特に言っていないのですが、小学生なりに感じているものがあります。ある日、認知症と診断されたメンバーの方が道に迷いました。セブンイレブンで焼き鳥を買ったのです。そうしたら、帰り道がわからなくなってしまった。そこに、この小学生が登場するわけです。「何しているの？」——そして、一緒にBLGに来たということもありました。ここに集う人すべてがメンバーなのです。年齢とか性別とかは全く関係なく、全員メンバーです。「1日楽しくやっ払いこうよ」と…。

こんな考えから、名前を「DAYS BLG!」としました。障害というのは、その人にあるのではなくて、周りが障害だったりするのです。または、自分の心の中に障害を持っているかもしれません。それは、「認知症という内なる偏見」と言われる方がいます。認知症と診断されたから、「ああ、もうおれはできないんだ。もうだめなんだ」と殻に閉じこもってしまうような、そういう障害です。または、社会から一方的に決めつけられてしまう障害です。それらを、みんなで集って、生活しやすい場、生活しやすい社会、生きやすい社会に変えていこうよというイメージから、この「DAYS BLG!」。Barriers Life Gatheringそれぞれの頭文字をとってBLGとし、さらに、「!」（ビックリマーク）、やっ払いこうぜ! がんばろうぜ! という意味合いを込めて、この「!」をつけました。

当初、東京都に提出する書類の中に、この「!」は認められなかったのです。「事業所の名前として、“!”がついている前例はないので、認めることはできません」と言われました。出た、前例。「いや、でも、“!”をつけてはいけないということは書かれていないですよね」「いや、書かれていないですけど、前例がないので認められません」。何で認めてくれないのですかということで、窓口で2〜3時間すったもんだありました。結局、認めてもらうことになったのですが、「前例」を超えるには粘り強さが大事です。「前例、前例」と言いますが、「粘り強く」です。

それで、こちらがパンフレットです。皆様のお手元に配布しているのと同じものです。今言ったようなことが書かれていますが、我々「BLG」の場所は、この地図で町田市成瀬台3丁目という番地です。2丁目と3丁目は高齢化率73%を突破しています。73%です。人が全然歩いていない。みんなどこに行ったんだろうというくらい、人が歩いていない、そんな

場所です。ですから、空き家もたくさんあります。住宅街ですけれども、町田だからできるということではないわけです。高齢化率 73%の場所なのです。

そしてここですが、丸が三つ書いてあります。これが特徴でもあるわけですが、ハブ機能を「BLG」は持っています。このパンフレットは、写真と利用者負担以外の部分は、スタート時と全く変わっていません。ですから、当初からハブというのを「BLG」に機能として持たせよう、社会・地域・企業とつながるための場所という位置づけを、当初から考えていました。それは、ここの“思い”という部分、声です。本人の思い——「働きたいんだ」「社会とつながりたいんだ」「役に立ちたいんだ」という声、そういった声をこの「BLG」に持ってきてもらって、そして、ここで仲間とつながり、または「BLG」という環境を利用して社会・地域・企業へ出て行く。つながっていく。それらの思いを実現していこうという場所なのです。絵にすると、こんな感じ——「家と BLG と社会」というような、そんな感じですよ。

「BLG」に来ることで、終わりではないのです。「BLG」に来ることが目標ではないのです。ここに来るのは、あくまでも思いを持って集うだけ。ここは「手段」なのです。「BLG」という道具を使って、社会とつながっていきましょーと…そんな居場所になっています。

大丈夫そうですか？ 緊張して結構色々なことが飛んでいるんです。ぜひ、「ここは、どうなんですか？」というのを、この場でもいいですし、9 時以降でもいいので、教えていただくと助かります。

ですから、我々「BLG」は、「デイサービスであり、デイサービスでない」というような考えです。みんなが集まるのは、朝と昼と夕の 3 回だけです。全員そろうのは、1 日のうちこの 3 回だけです。朝は、「きょうは午前中、何をしましょうか」「お昼は、どうしましょうか」ということをみんなで決めます。お昼は、「きょうの午後、どうしましょうか」というのをみんなで決めます。そして夕方は、「きょう 1 日どうだったでしょうか」というように振り返ります。この 3 回だけしか、みんなが集まらないのです。つまり、「社会とつながりたい」とか、「役に立ちたい」と思われていたりとか、「働きたい」とか、そういった思いを実現するために、みんな外に出ている。または、この中で社会とつながっているという状況になっています。こんな活動を、先ほどの 2011 年の通知をもとにやってきました。

いや、しかし、時間も経過したことだし、そろそろあの通知自体をバージョンアップしなければいけないのではないかな。パソコンも 7 年使えば、あまり調子がよくない。私も 7 年でパソコンを買い替えました。通知も 7 年で変わり、バージョンアップしました。2018 年、去年の 7 月にこんな通知が出ました。「若年性認知症の方」と先ほどの通知には書いてありましたが、今回は「若年性認知症の方を中心とした」と書かれています。(2024 年 8 月に再度通知)そして、先ほどのものは「ボランティア活動について」ということだったのですが、「地域での社会参加活動」という大きなくりに変わっています。これについて厚生労働省は、こんなことを書いています。見えないですね。「厚生労働省・介護保険最新情報 669」で検索すると、これが引っ張ってこられますので、そちらで詳しく読んでいただければ、「あ

あ、なるほど。2011 年の通知からバージョンアップしたんだ」ということがわかります。

しかし、バージョンアップするにあたって、背景としては 2011 年の通知をもとに活動していたのが、私たち「通所系サービス」しかなかったのです。前の通知では、介護保険サービス事業所であればどのサービスでもできたのですが、7 年間見てきましたが、やっているところは私たち「通所介護事業所」だけでした。ここはバージョンダウンしようというように悲しい内容も書かれていて、「通所系サービスに限る」と限定されてしまいました。つまり、通所介護、通所リハビリ、小規模多機能というものに限定されています。ここが若干バージョンダウンしました（最新の通知では全ての介護保険サービスが該当となる）。

しかし、通所系以外のサービスを利用されている方たちは、もちろん多くいらっしゃいます。暮らしている方もいらっしゃいます。その方たちも、同じような思いを持っていると思うのです。そこをいかに形にしていけるか、声をどうやって届けていくか、そしてこの通知を次のバージョンアップでもう一度、「介護保険サービス事業所においては」と書きかえていけるようにしなければいけないと思うわけです。そんなことが書かれているので、ごらんください。

通知の最後に、参考実践例として「BLG」のことがドーンと出たわけです。実践例として、「こんな感じでやっていますよ。みなさん参考にして広げていってくださいね」と…。前の老健局長の鴨原さん、カモちゃんが局長時代に（今は退官されていますが）、私はこっそりと「BLG」のパワーポイントを渡したのです。そうしたら、なんとカモちゃんが全国各地で、「これからは BLG のような場所を、デイサービスと呼ぶぞ」ということを言って歩いたのです。

そうしたら、全国から町田市役所に問い合わせが入って、「町田市さんはどのようにお考えですか？」という問い合わせがあり、町田市から、「前田さん、どうなっているんですか」というクレームを受ける。それで私が、「カモちゃん、どうなっているんですか？」とまた問い合わせるということが一時期ありました。これは多分、カモちゃんに渡したパワーポイントからつくったと思われるもので、参考実践例ということで出ております。

社会参加という部分で、「働く」というのがキーワードになりつつありますが、「働く」というのはいろいろなパターンがあります。いわゆる働く＝労働は、だれかのため、社会のため、「BLG」のため、家のため…いろいろな「働く」があると思います。そんな思いを「BLG」に持ってきて実践・活動し、そして思いを実現しているところです。認知症があるとかないとかは、あまり関係ないのです。

先ほど、朝・昼・夕だけ集まって、朝と夕方は、「午前中、どうしましょうか？」「お昼、どうしましょうか？」と聞いていますと言いましたが、そうやって皆さんと一緒につくっています。これは、選択場面をあえて設けることで、満足度を上げていこうという思惑があるのが一つ。もう一つは、そんな思惑はどうでもいいのですが、我々は日常生活においている

いろな選択をしながら生きています。「のどが渴いたなあ。一口お茶を飲もうかな」これは意識下の選択です。今飲むか飲まないかという選択をしているわけです。選択の連続です。

「トイレに行こうかなあ、どうしようかなあ。もうちょっと我慢しよう」「ちょっとこの教室寒いなあ。上着着ようかなあ、どうしようかなあ」…いろいろな選択を、考えるというより意識下で行っています。

選択するための質問方法があります。我々が多く使っているのが、セミクローズド・クエスチョンというものです。オープン・クエスチョンは、「きょう午前中、何しましょうか？」という投げかけで、投げっぱなしで、答えも、「何でもどうぞ」というものです。そうではなくて、これ(セミクローズ)にしている理由は、オープン・クエスチョンだと急に振られてもなかなか出てこないのです。「きょう、どうしようか？」と言われても、認知症のあるなしにかかわらず、「そうだなあ、どうするかなあ」となります。

でも、このセミクローズド・クエスチョンというのは、例えばきょうの午前中、「ホンダでの洗車」という仕事があります。もう一つは、「チラシとかをポスティングする」という活動があります。もう一つ、「お昼のお弁当に何か一品つけ足しますか？」「みそ汁でもつくりましょうか？」「みそ汁つくるにも一品つくるにも材料がないですね。買いに行きますか？」というような、いろいろな選択肢をこちらで少し準備します。その中から、「これにしようかな。あれにしようかな。でも僕は領収書の整理があるんだ」なんていうふうに、自身の役割を、「領収書の整理をするんだ」という声を出して、「僕は、これをしたい」ということを言われる方もいらっしゃいます。

そんなことで、スタッフは4人ですが、毎日大体5グループくらいに分かれるわけです。認知症があってもなくても、介護を受ける一方ではなく、介護をする、サポートをするという存在でもあるわけなので、だれがスタッフになってもいいわけです。ただ、介護保険制度の基準上スタッフというのがありますが、この場ではそんなのは関係ないわけです。そんな質問の形態を使いながら、毎日、お昼御飯も活動も決めていきます。お昼御飯も、部屋で食べるときは、つくるのか・買ってくるのか・とるのか。もう一つは外に食べに行く。もう一つは、カラオケボックスにお弁当を持ち込んで、歌いながら食べたい——なんてことを毎日毎日やっています。

もう1本動画がありまして、これを皆さんに見ていただいて、ちょっと感想をお聞きたいと思います。大体、2分ちょっとの動画です。

(ビデオ上映開始)

〈字幕〉 ありふれた住宅街の一角。ここで今年も BLG! のありふれた日常が始まった。DAYS BLG! の日常。

○前田 おはようございます。

○一同 おはようございます。

○前田 おめでとうございますですね。水曜日、新年初、第1回目ですね。

さて、きょうの活動を皆さんと話しながらかめていきたいなと思いますけれども、ホンダでの洗車がありますね。

○伊藤 私、洗車を1回やってみたいと思うんだけど、やれるかな？

○前田 伊藤さん、やってみます？

○伊藤 やってみる。

〈字幕〉 BLG!では、その日にやりたい仕事をメンバーみずから選ぶことができる。洗車を発注している地元のカーディーラー。メンバーは展示車を洗車し、報酬を得ることができる

○伊藤 イヤだもう…見てるだけで寒い〜。もう、やめる

〈字幕〉 この日、午前の気温は5℃。寒風の中での作業

○伊藤 これでも洗車になるのかな…。

〈字幕〉 拭き上げのみ参加…

○伊藤 これでも掃除したことになった？

○前田 掃除したことになっています。伊藤さん、チャレンジャーですね。

○伊藤 チャレンジャー？

○前田 何でもチャレンジしますね、伊藤さん。

○伊藤 そうよ、何でも好きなの。

〈字幕〉 一方、仕事に参加せずのんびり過ごす人も…。BLG!では、その日どう過ごすか、本人の自由

○撮影クルー こちらはお味噌汁チームですね。

○女性 取材されるほどのベテランじゃございません。ワカメとおネギを…。新米ママみたいなものだから、恥ずかしいですよ

〈字幕〉 弁当と味噌汁を部屋で食べる人もいれば…弁当を持って外に繰り出す人…。行先はカラオケボックス。少し安めの弁当で昼食代を節約。ランチカラオケを楽しむ

○撮影クルー 外のほうがいいですか？

○男性1 あそこ、つまんないじゃん。

○撮影クルー 弁当の味はどうでもいいんですよね？

○男性1 入りゃいいんです。

○男性3 …ということで、カラオケ終了でございます。

〈字幕〉 午後は近くの丘陵地を散歩。BLG!に来てから何が変わったか聞いてみました

○男性 結局、同じ人がいるからね、悩みがどうのこうのとか、同じようなところが、みんな同じだね。それに気づかされました。ショボンとしていてもしょうがないから…

○前田 じゃあ、アレですね。「私の楽しみは○○○です」みたいな感じで…。楽しみってあります？

○女性 分け隔てなくお話をうかがったり、したりできるようなことは、やっぱり日常家にはできませんものね。

○前田 認知症があるとかないとか、あまり気にしないですものね。ここに集まる、BLG!に集まる仲間という感じで…。ということはこんな感じですか？ 私たちの楽しみは BLG!に来て仲間に会えることです。

○男性 あれですよ、「未来につながっています」。未来につなげたいんだけどな…

○前田 「私たちの楽しみは BLG!に来て仲間に会えることです。そして未来に続いていきます」。

〈字幕〉 BLG!メンバー” we メッセージ”。私たちの楽しみは、BLG!に来て仲間と会えることです。そして未来に続いていきます。

(ビデオ上映終了)

○前田 なんていう、こだわりの動画だったのですけれども…。1本目の動画は、編集の会社のほうで勝手につくられたものですが、これはもう、ものすごくこだわってつくったので、ちょっと感想をお聞きしたいです。2～3人の方に。前の方にお聞きすると思いきや、3番目ぐらいの方に。

○女性A こんにちは。感想？ 私、実は2回ほど伺っているのです。だからとても懐かしかったというか、あのとおりですね。本当に皆さん明るくて。お弁当もいろいろなところで食べるとか。カラオケは行かなかったのですが、お味噌汁をつくっていたりして、とにかく楽しい感じで。「ああ、すばらしいな」と思って、ちょっとあるものにかかせていただいたのですが…。

きょうは前田さんにお会いできるのを楽しみにしながら来ました。本当に画期的なことを始められたので、もっと広まっていくと思ったら、なかなかハードルが高いのでしょうか？ すみません。感想にならなかったですね。

○前田 大丈夫です。ハードルですね…。ハードルを越えるために、ある取り組みをこれから始めようとしていますが、そこはちょっと置いておいて…。どうだったでしょうか。今の動画の感想は？

○女性B 認知症になっても安心だなあと…。なりたいくらい。

○前田 はい、ありがとうございます。以前、「BLG」に来ていただいた方は、「懐かしい。あのまんまだな」ということと、「楽しそうだな。認知症になっても安心なんだな」というような感想でした。

この、こだわった動画の理由は、今見ていただいたこの2分間の中にあの場をつくるのですが、あの場は放っておいてもなかなかできないのです。「みんな集まってください」と言っても、できないのです。この2分間だけですが、あの場をつくるため、この2分間の中に約50の技術が入っていたのです。おー、なかなか…。この50の技術の一つ一つ分解して伝えていくと3時間くらいかかるのですが、実際に内部研修でやりました。

一例として、先ほどのおばあちゃん。洗車を希望したのだけれど、「寒い。もう嫌だ」と言っていたあのおばあちゃんは、「BLG」の最高齢なのです。年齢は女性なので控えておきますが、保健師さんです。それで、彼女の心をくすぐりながらやるわけですが、「寒い。嫌だ」と言ったところに一つ、あの女性は、「水を使った仕事が嫌だ。寒いので水は使いたくない」ということだったのです。洗車というのは、作業をバーッと分解すると、10 まで書いてありますがもっともといっぱいあります。バーッと分解して、「どこが嫌で、どこだったらできるのか」。また、「嫌だと言った部分をだれがやるか」ということを瞬時に判断してやっていくわけです。

彼女は、「水を使う仕事は嫌だ。けれども、拭き上げる仕事だったらやれるかな」ということでやり始めました。ですから、ここでいうと8番くらいからかかわってもらったわけです。そして1～7番までは、ほかの人が何人かで作業を分担して、できること・できないこと、得意なこと・得意じゃないことを全員で持ち寄って、1～10の洗車というのを仕上げていくわけです。「BLG」では、それを「洗車」と言っています。ですから、全部をやってくださいということではなく、あくまでもできること。無理なくやれることを、みんなでシェアしていくというものです。ざっと説明をいたしました。

それで、「前例を越えていく」ということですが、この「前例」とはリスクで、「何かあったらどうする」ということです。でも、「自立支援」と書いてありますが、私たちは果たしてそれをリスクと呼ぶのかということです。例えば、「転倒」ということにリスクを置くのかというと…いやいや、違うでしょう。危ないから座っててください。危ないから、何かあったらどうしよう。転んだら、けがしたら…それでは座りっぱなしです。廃用性症候群をリスクとして捉えないでどうする。動かなければ筋力は低下します。褥瘡もできてしまいます。でも、「転倒が…」という人がまだまだいたりもします。我々は、この廃用性症候群をリスクとしてとらえて、いかにここを少なくしていくかを考えます。

転倒というのは、日常ではよくあることです。きょうも最寄り駅の階段で、女性がヒールをはいていて転んでいました。でも、あえてヒールをはくわけです。転ぶんじゃないかとわかっていても、おしゃれをしたいからヒールをはくのです。転んだら危ないから、ヒールをはいちゃだめなのかということです。これが日常です。今の介護保険だとか何だとかは、非日常的過ぎるのです。でも、日常が大事なのです。

ですから、我々のところでは、スタッフはもちろん制服はないです。制服はないですし、こんな感じの私服です。女性のスタッフに対して、「何でスカートをはかないの？」と聞くんですね。「街の中を歩けば、スカートをはいている人はいっぱいいるじゃん？ みんなだってはいているでしょ？」「だって、ズボンというふうには決まっていらないんですか？」「決まっていないよ。スカートでも全然いいじゃない。スカートはけば…」と。あまり言うとかセクハラになるので難しいところですが…。

つまり、事業所の中だけが非日常であってはいけない。日常でなければいけないでしょう、と。「同じメンバーなのだから、いつもと同じ格好でいいじゃない」と言っています。リスクというのは、日常という点にいかに関点を置いて考えていくかということです。時間があれば、もっと皆さんと、もんでもんでやっていこうと思っていたのですが、時間がないので…。

さっきのヒールをはいた女性もそうですが、映画を見に行こうと思っている我々もそうです。朝起きてから映画を見るまでに、いろいろなことをします。「朝起きて、何をしますか？」と、ある理学療法士の研修会で聞いたことがあります。そうしたら、朝起きて一番初めにやることは、「目を開けます」と言ったのです。「そこにリスクはありますか？」「目ヤニで目が開きません」「どうしますか？」「温かいタオルでふきます」なんて言っていましたけれども…。映画を見に行くまでに、いろんなリスクがあります。けれども、我々は「映画を見たい」という目標に向かって、日常生活は、「映画を見に行く」という部分だけでも、あるわけです。認知症だからとか高齢者だからとか、そういうのは関係ないわけです。

「どうやれば映画を見られるようになるのか」という視点です。一人で移動するのがちょっと不安…では、どうしよう？「一人で移動するのが不安だから、出ないで」ではなくて、どうやって移動すれば映画を見られるか、どうすれば目標を達成できるのだろうかという考え方です。

動画にもありました洗車、そしてコミュニティフリーペーパー『ショッパー』という新聞を折りたんでポストに入れるという仕事。そして、紙芝居の読み聞かせというのも、毎年夏休みに市内の学童保育所 14 カ所で開催しています。「認知症のあるおばあちゃんと僕という主人公が二人。そして、おばあちゃんが老いていく。そこに僕が寄り添う。でも、おばあちゃんは、おばあちゃんだよね」という、認知症のあるおばあちゃんと僕を主人公とした紙芝居ですが、これを子供たちの前で読み聞かせをします。認知症と診断された当事者の方が、読み聞かせをします。

認知症のことを知ってもらおうと思って始めたものが、読み聞かせをしているメンバーさんから、「それだったら、おれたちのことをもっと知ってもらったほうがいいんじゃないか」というので、カミングアウトをすることにしました。「実は、おじちゃんもおばちゃんも認知症なんだよ。みんなの顔を忘れてしまう。だけど、みんなは覚えてくれている。だから街で会ったら、こんにちは、こんばんは、おはようございますと、あいさつをしてほしい。道に迷うかもしれない、迷っていないかもしれない。けれども、あいさつをされるとうれしいな」なんていう締めくくりで…。「あいさつが自然と生まれる地域」というのが目標に変わりました。この読み聞かせを受けた子供たちは、現在 6,000 人を超えているという数字があります。

もう一つ。先ほど出てきた駄菓子屋さんもメンバーのうちです。こんな小さな駄菓子屋さんです。子供たちが駄菓子屋さん買いに来ます。そして、そのうちの何人かがお手伝いを

してくれるようになりました。「家でお手伝いはしないの？」と聞くと、{家だと、お手伝いしようと思っても、勉強しなさいと言われるからしないんだ}とっています。今ではトイレ掃除もしてくれるようになりました。まあ、そんな駄菓子屋さんに来る子供たち。子供たちだけではなくて、いろんな人が集まるわけです。集まりたい、そこに行きたいと思うわけです。中には、「知っているよ」という方も何人かいるかもしれませんが、いろんな人が出入りをしている場所です。仲間がいるから、ここにいたいという居場所になっています。

これは、YouTubeで「町田市 認知症 働く」と検索すると、この動画を見ることができますので、そちらで御確認いただければと思います。5分くらいあるので、ここは飛ばしたいと思います。と言いながら流れておりますが…。

私たち「BLG」は、「働く」ということをキーワードに、今までやってきました。2012年の8月1日から、「働く」「働ける場所づくり」「働く仲間」なんていうのを一生懸命やってきました。あまりに「働く」ということに力を入れ過ぎましたので、本人の「働きたい」の裏側にある声や思いというところには、なかなか目を向けてこれなかったのです。そして、目を向けたときに、「働くことを通じた仲間づくり」というものが見えてきたわけです。「一人で、こんな洗車なんかやりたくないよ。だけど仲間と一緒にだから、働きたいんだ」というのです。「仲間と一緒にだから、いろんなことをやりたいんだ」「仲間がいるから、ここに来たいんだ」ということを言われるようになりました。その声が聞かれるようになったのが、今から2年くらい前です。

今は、「社会参加」というのが結構叫ばれていますが、その裏側にある声——本当は何を求めているのか、何をしたいのか、もう一度原点に立ち返って、本人の思いや本人の声に耳を傾ける。そこから恐らく、前例を、今まであるものを超えていける、変えていけるのではないかと思います。続きはYouTubeでということですが…。

つまりは、素になれる場所です。認知症を全員が受容しています。受容していない方も何人かいらっしゃいますが、「それは認知症だよ」と、ほかの仲間から、メンバーから言われます。「おれ、認知症だからな、忘れちゃうんだよな」というふうに、分が悪くなるとかみさんに「自分が認知症だ」と言う人もいます。それくらい、心からオープンになれるのです。

社会に出ている人はみんな、女性も男性も、相手に弱みを見せないように強く強く自分を見せます。そのために、心に鎧を1枚、また1枚と着込んでいくわけです。けれどもそれが、自分を受容していく部分においては「足かせ」になることが結構あるのです。それは、「プライド」という形であらわれるのかもしれないです。それを1枚1枚脱げる場所は、なかなかないのです。

ここは、自分の弱みを見せられる場所でもあるわけです。弱みを見せても責められない場所。失敗が許される場所。忘れても、「別にいいじゃん」と言える場所、言われる場所。「素(す)」になれる場所です。家以外で「素」になれる場所。仲間が自分のことを認めてくれ

る、そして責められない、そんな居場所です。仲間がいるからそこに行くんだ。仲間と一緒にだからという…ここが一番大事な部分です。「働く、働く」というのをずっとやってきました。2011 年の通知が出る前から、ずっとずっとやってきました。けれども、この2年くらいで、「働くのはあくまでも手段で、それが目的ではない」ことに気づきました。目的は、「素になれる、仲間がいる場所に行ける」ということなのです。

こんなことを書いた人がいます。「私も認知症という病を得てから、人生観が変わりました。それは、決して自分を捨て去るということではないことを悟ったのです。友と共に生き、友と共に楽しみ、友と共に苦しみ、友らと共に語ること。まさにこのような人生を送ることこそ、キラリと光る人生のような気がするのです。決してあきらめないでください。あきらめることで、何も生み出すことはない」と存じます。いつか、また語り合える時間があれば、ぜひ。素晴らしいことではありませんか。

池田英材さんという方が、これを書きました。これを書いた2日後に、彼は亡くなりました。実は池田さんは、「BLG」に来るまで孤立していたのです。生活保護ビジネスというのを聞いたことがあるかもしれませんが、6 畳1 間に2 段ベッドをドーンドーンと2 台置いて4 人で暮らしているという、そういう環境の中で孤立していた彼が、「BLG」に来て、心のよろいを1 枚1 枚脱いでいって、そして仲間（彼は「友」と表現していますが）とつながることによって、社会とつながることによって、このような仲間の存在の大きさというのを感じ取っていきました。

この「声」を聞いた者の責任として、どのように次に生かしていくのか…。「BLG」では、このような声は日々たくさん聞かれます。こんなような声が聞こえます。そして、こんなポスターになりました。これをつくったのは、NHK の元ディレクター・平田さんです。その平田さんは、この6 月に「BLG」に加わって一緒に活動をしていくことになりました。

これも多分、どこかで見たことがあるかもしれませんが、そんな「BLG」をもっとよく知っていただくために、言葉で伝えるとなかなか時間がかかるので、VR というものも活用しています。実は、「BLG」にも VR があったのです。これは、あのガッハッハと笑っていた要介護3 の村山さんです。ときどき市内の防災無線で、「どこどこにお住まいの村山アキオさん、68 歳・男性の行方がわからなくなっています」というのが流れるのですが…。その村山さんの視点で、村山さんのナレーションで、「BLG で過ごす1 日」といった内容のものを、ここのアドレスを入力していただくと NHK のサイトで、VR でごらんいただけます。スマホでも、パソコンでも大丈夫です。パソコンの場合は、クリックして動かすと画像が追いついていくというようなものです。もしよろしければ、ごらんください。

そしてもう一つ、ラジオもやっております。『NEA (ネア)』という番組です。この『NEA』はインターネットのラジオ局なので、ここに第1 回目からの放送がすべてアーカイブされています。ですので、ここにアクセスすると第1 回目からの内容が聞けます。もう既に第14 回くらいになっていて、パーソナリティは私と…「BLG 八王子」というのがありまして、八

王子のモリヤという者と平田という者、この三人がパーソナリティを務めて、これからの社会、これからの介護業界についていろいろなことを話しています。そして、編集・音声などの裏方さんは、町田市役所・介護保険課の職員がすべてを担っているという、一風変わったラジオ番組です。

もう一つがWEB（ウェブ）で、『なかまある』という朝日新聞系列のウェブサイトです。こちらに、『きょうのBLG』というタイトルで、1週間に2回ほど更新しています。これは本当に日常です。メンバーが言われた言葉を、なるべく多くそのWEBページに載せるようにしています。

そして、先ほどドルミさんが言われた、「このような活動がなぜ広がっていかないのか？」というのは、一つは介護保険の仕組みにあります。同じ時間でサービスを提供するのであっても、このような活動をやる場所もあれば、よくあるデイサービス——お風呂がついていて、食事は上げ膳・据え膳。そして、やりたくもない計算ドリルや塗り絵（やりたい人はいいですよ）——そういうものを提供しているところもあります。なぜなら、それらをやっていただいて、どこにも行かないようにして、安全・安心を第一優先にしている。その安全・安心は、心の安全安心ではなくて、体の安全・安心です。けがをしないように、来たときと同じ状況で帰っていただきましょうというデイサービスだからです。

同じ時間で考えると、収入は同じです。なので経営者としては、「収益が同じなら、そんなチャレンジをする必要はないじゃないか。今までどおりでいいじゃないか」ということになります。ですが現場の人で、「やりたい」という声はたくさんあります。

先ほど出た平田さんが、「BLG」に来るというのは、100BLG 株式会社というのを立ち上げて、「100BLG project」をつくり、そこに平田さんが加わっていくのです。まずは、働くということ。いろいろな「働きたい」がありますが、働くデイサービスを始めてみませんかというものです。これはフランチャイズではなくて、日本全国100カ所で展開していこうというプロジェクトです。どこの「BLG」に行っても、それぞれの地域の色に合わせながら展開していこうというもの。実は今、八王子・盛岡・町田の3カ所がありますが、すべて都市モデルです。これからやっていこうとしているのは、山モデル、海モデル——つまり、地方モデルをやっていこうと考えています。そして、それらすべてが出揃うと、100カ所展開できるのではないかと考えています。

この100カ所を展開していくに当たっては、先ほどの動画で「50個くらい技術があります」と言いましたが、1日に換算すると大体400個ぐらいの技術があります。それらをすべてマスターしていただく。研修やら何やら、そして運営部分もすごく手厚く応援をして、「BLG」という場所をつくって行きます。現在、稼働率は90%を超えています。「また来たい」「仲間がいるから楽しい」…そんな声が、この稼働率を支えているのだと思います。

実際に、全国のデイサービスと「BLG」のデータを比較しました。何のデータかというと、「どれだけ維持・回復できているのか」というデータです。全国すべてのデイサービスを含

めた数字と「BLG」なので、リハビリ特化デイサービスとかも入っての数字です。全国的に見ると、23%の人たちが維持・回復できていると答えています。でもその解答は、実際には家族が答えていたりするので、あまり当てにならないデータでもあるのですが…。我々は、「BLG」に参加している本人に聞いたものと、要介護度がどれくらい変わったのかというデータを複合して出したところ、23%よりも13%高い数字が出ました。こんなものを一つの方法としながら、また「BLG」を始める前と始めたあと、ビフォー・アフターのデータを取りつつ、全国に100カ所つくっていかうとしています。

先ほど一番最初に流した動画の中でホンダの営業主任の方が、「変わりました。時間を共有する、活動を共有することで変わりました」と話していたように、人は人と接することで変わるきっかけを得ることができます。認知症サポーター養成講座修了者が1,000万人を越えましたが、あまり実体がないのはそういうことです。3日寝れば忘れてしまいます。人と接する機会がないのです。今、「認知症の人探し」という現象が実際に起きていますが、そうではなくて、実際に当事者とともに時間を共有していくことで、「BLG」につながった企業の人たちが変わっていています。でも1カ所、2カ所、3カ所では、まだまだ弱いのです。それを100カ所にするることによって、100倍、200倍の力に変えたいのです。

そして、こういう場所を望んでいる当事者の方が全国にたくさんいます。先日、新潟から電話がかかってきました。元社長の人です。その人は、「交通費とかはいいから、新幹線で行く。おれもそこに通わせてくれないかな」と言ったのですが、それではだめなのです。そのような声を聞いた人たちが、その地域で展開していけるように、まずは100カ所つくっていかうというのです。ですので、拡がりか鈍い、スピードが遅いと感じるのは当然だと思います。私も感じていました。ただ、それを見過ごすのではなくて、そういった声を聞いた者が実際にやっっていこうと…。

今回は、「前例を越えていく」というテーマをいただきました。それを越えていくのは、すべて本人の声です。それが原動力になって、今の私がおります。ですので、ぜひ皆さんも目の前の、隣の、または、うしろの当事者の声を——認知症のあるなしにかかわらず、声を聞いたら、「何か一緒にできるか?」「どうすればできるか?」、やめるのではなくて、「どうすればできるかな?」という考えを持っていいただければいいのではないかと思います。

残りの資料は、参考資料ということにさせていただきます…。またどこかで、このあとも放課後というお時間があるそうなので、そこでも、またぜひと思います。ひとまずここまでで、終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

○ゆき　ありがとうございました。9時には終わるぞと宣言したけれども、やっぱり10分になってしまいました。

どうでしょうか、質問は？　では、まず議員さんになりたての…。

○斎藤 ありがとうございます。私、父親の認知症があつて、6年前から認知症カフェを浦安市でやっております、斎藤哲(あきら)と申します。私の中でも認知症がライフワークで、「認知症になったからといって、それまでどおりの父である」ということを訴えるために、いろいろと活動を始めたのがキッカケだったので…。すごく共感しながら、お会いするのは初めてですが、ずっと追わせていただいていたいました。

いろいろあつたのですが、まずボランティアの依頼主を——今はもう、名前や活動も売れているのでいいと思うのですが——やろうと思つても、そういう依頼主を探すというのは、最初はすごく大変じゃなかったのかなと思うのです。そこで、最初に投げかけたときの反応とか、どうやってボランティアの依頼主を獲得していったのかというのを、ちょっとお聞かせ願えないでしょうか。

○前田 はい。ボランティアの依頼主ですが、一番始めは、ホンダの洗車を獲得していくため、あとは地元の企業とのつながりをつくっていくため、という2パターンを考えていました。なぜ2パターンかという、全国に支店があるほうが、同じ活動を全国に展開するとき、「前例」があるから活動がしやすいのではないかという予測のものと…。あとは、地元の企業とつながっていくのは、町田市ならではの動きという部分で考えていたので、つながりをつくるためにやっていました。

今は、このくらいの企業とつながっているのですが、ホンダとつながるまでには1年半という時間がかかりました。それまでにも、ほかの企業を何社も何社も歩き渡つて、断られ、門前払いをされ、担当者は出てきてくれるけれど、「ちょっと社内で検討」という口実をつくられて、結局は断られるわけです。

ただ、「BLG」を立ち上げる直前は、私一人でそういった営業をしていたのですが、立ち上がってからは皆さんと一緒に営業をするようにしました。ものすごくポジティブな考え方もかもしれませんが、断られたとしても、実際に当事者との時間を共有することが1分でも2分でもできれば、担当してくれた、応対してくれた社員の人たちの意識が少しでも変わるんじゃないだろうか。少しでも変わればチャンスだぞと…。当時は、元々そういう考えを持っている社会があつたので、「当たって砕けないで、またその次に当たろうか」というような考えでやっていました。

そういうことで、1年半かけながらホンダを、そしてもう一つは、地元の企業の野菜の問屋さんとつながることができました。今では野菜の配達、チラシ配りといったお仕事。そしてホンダでは、洗車。年末には、新年の新春初売りのため、お店にお客さんが来たときにわたすノベルティ——女性の方が喜ぶ食器用洗剤とか、サランラップとか、タオルというようなもの——を福袋に詰める仕事なんていうのを、いただけるようになってきたというのが正直なところですよ。

だからホンダに関しては、本当に粘り強くやっていました。担当者を捕まえて離さないみたいな、1日に5～6時間を超える粘り強さ…。さっきの営業主任がそうだったのですが、

1年半の中で、居留守を使われることが何回もありました。ディーラーはガラス張りなので外から見えるのです。「あっ、今、隠れた」とか…。みんなで行っているのに、無言で外から手を振るのです。無言のプレッシャーをやってみたりとか…。

大きな企業に行くときは、本社ではなく、現場の営業所に行って話をしました。なぜなら、本社に行くと話は早いですが、本社から、「おまえら、やれや」という指示や命令がバーッと降りてくる。すると現場では、「この忙しいのに、何でそんなことまでやらなきゃいけないんだよ」という意識が芽生えてくる。すると空気が悪くなる。そこで、例えば洗車中に車に傷をつけてしまった場合に、「おまえら、やっただろ。おまえら、もう来なくていい」というような、最悪な空気の中でやらなければいけない。そうではなくて、現場の人たちと一緒に進めていって、理解を得て、納得をしていただきながらボトムアップしていくという方法をとりました。なので、1年半かかったということです。

○斎藤 ありがとうございます。「粘り強く」ですね。ありがとうございました。

○ゆき ちょうど時間になっちゃったものですから、この続きはカラオケボックスでと思います。カラオケで歌わないカラオケボックスへどうぞ。

ではみなさん、盛大な拍手で感謝してください。

ありがとうございました。すばらしいお話でした。